

中野重治全集

第二十一卷

中野重治全集

第二十一卷

筑摩書房

中野重治全集第二十一卷

一九七八年二月二十八日初版第一刷発行

著 者 中 野 重 治

発 行 者 岡 山 猛

発 行 所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号 一〇一―九一

電話 〇三〇七六五一(代表)

振替 東京六―四一―二三

印刷 株式会社精興社

製本 株式会社鈴木製本所

装釘 桧折久美子

第二十一卷 目次

藝術家の立場

三

近代日本文学史考

一五

文学談話

三五

後記

著者うしろ書 敗戦・無条件降伏意識の曖昧さ

四二五

解題

四三

藝術家の立場

子供のための文学のこと

文学と政党

これから小説を書く人へ

共産主義と文学

文学と政治

藝術の心

批評の問題

人民・革命・労働者階級の文学

子供のための、少年少女のための文学について

藝術家をはぐくむもの

藝術家の立場

身分、階級と自我

近代日本文学史考

三 九 三 三 四 五 六 六 九 二 三 七 一

日本文学史の問題

一五九

「ナップ」について

一六六

「ナップ」時代後半期の意義

一八三

日本におけるプロレタリア的・革命的文学の流れについて

二〇二

プロレタリア詩の発展

二〇九

現代詩の一つの転換

二二六

第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて

二四一

第二世界戦におけるわが文学

二五五

近代日本文学の背景としての労働者階級の成長

二六八

いわゆる「昭和十年代」の文学

二八八

プロレタリア文学の理論

三〇二

被圧迫民族の文学

三二五

文学談話

前書き

三三七

東方社版前書き

三三八

一	ひろい意味での文学とせまい意味での文学	三九
二	文学をつくるということ	三四
三	文学と政治との関係	三四
四	専門作家と勤労者作家ということ	三五
五	働くものの文学と革命の文学 一	三六
六	働くものの文学と革命の文学 二	三七
七	日本の文学・文学運動をどうするか	三七
八	文化問題と組合活動との結びつき	三八
九	労働者のなかから生れる新しいインテリゲンチヤ	三九
十	労働者階級と新しい文化	四〇
問と答		四〇

藝術家の立場

子供のための文学のこと

文学者のせねばならぬことの一つは子供のための活動である。子供のための文学者の活動が非常に大事である。いままでも大事ではあつたが今はいつそう大事になつてゐる。文学者たちはこの方面で覚悟をして仕事して行かねばならぬと思う。

子供らは困難に面している。いままでも彼らは苦しんできた。彼らは菓子を食べなかつたし勉強することができなかつた。彼らは限界を越えて無理に仕事させられた。「勝つために」、「ほしがりません勝つまでは」、彼らは千松イデオロギーに落ちこんでまでそれを我慢してきた。そして挙句に敗戦に導かれた。

そして彼らは飢えてゐる。学校は焼かれた。教科書はまだ出来てゐない。いままでの教科書は一部削られてその埋めあわせが出来てゐない。童話の本も、物語の本も、絵本もない。おもちゃもない。音楽もない。体操さえない。そしてそれらすべてを乗りきつて彼らは進んで行かねばならぬ。そういう大困難に彼らは面している。

また彼らは、ことに大きい子供らは、帝国日本の決定的敗戦の真意義を知らねばならぬ。彼らは日本歴史を知らねばならぬ。日本歴史のどの点にこの敗戦を位置づけるかを了解せねばならぬ。そしてそのことでいじけずに、いじけの反対へ出て行かねばならぬ。彼らはすべてのことの了解がその一語で終り、了解のための努力がその一語で最後の遮断された天皇の問題が逆になつたこと、エビログからプロログへまわつたことを了解せねばならぬ。この了解のためのあらゆる厄介をとおして、そのむこうへ、プロログそれ自身のエビログへ、健康に、見る眼に美しく伸びて行かねばならぬ。こういう大困難に彼らは面している。そうしてこの困難の征服のた

め、この困難を征服せねばならぬ子供らのために、日本の文学者のせねばならぬことは非常に多く、大きく、重大であり、重大となつたと思う。

日本の文学者は、特に子供のための文学の作者、童話作家、児童文学者らは、その仕事の本質が、子供の感じ方、考え方にたいする教師である点にあることを十二分に知らねばならぬ。それは、大人のための文学の場合よりもずっと直接にそうなければならぬ。大人のための文学の場合、たとえば小説家は、ただ書いていればいいということが或る意味で便宜的に言える。子供のための文学の場合はそう行かぬ。作家はそこで、直接教師として乗りださねばならぬ。直接、教師として。そのため作家には大確信が生れていねばならぬ。

確信は知識に関するものではない。知識にも関係はあるが眼目ではない。眼目は、子供たちの品性の陶冶、真善美にたいする健全な感覚の育成という点になければならぬ。正しいもの美しいものをそのものとして認識し、正しいものを正しく、美しいものを美しく定着させて行く仕事能力を子供のなかに養うこと、これが教師たちの確信の主要眼目でなければならぬと思う。

そうして、民主主義の講釈などするこまちやくれた子供の出来ることが目的でなく、民主主義実現のための仕事能力を持つ子供の育成ということが目的である以上、日本の童話作家、児童文学者たちは、作そのもの、その作の出版についてのすべてのことで、出版資本家のため普通の作家以上にこき使われてきた彼ら独自の過去の状態から至急に脱け出ねばならぬ。

じじつ日本の児童文学者たちは、悪出版屋、悪官吏、悪軍人にこき使われることがほかの文学者よりも一般にひどかつた。彼らは戦おうとしたが、彼らのある弱さがそれを妨げた。子供への愛、子供のために仕事することの喜びは彼らに充滿していたが、その愛と喜びとの純粹が彼ら特有のある弱さに結びついてた。彼らは弱く純粹だつた。彼らには、悪出版屋、悪官吏、悪軍人、悪教育家と戦い、それらとかけひきし、妥協し、ふたたび攻撃する腕と度胸とが欠けていた。そうして、腕と度胸との出来ることが、彼らのなかで、彼らの純粹を保つこと

と両立できぬように彼らに見えた。彼らは、彼ら自身に、実地にはない、またあつてはならぬ主観的なこれかあれかを立てて、この腕と度胸とよりもあの純粹を取ろうとした。彼らは戦いを避け、あるいは最小抵抗線で戦い、受け身でかけひきし、屈服的に妥協し、攻撃せずに一方的に防禦することでその純粹を保ちつつ仕事しようとした。そしてそのことで相手のさばらせつつ自身を窮地に入れた。そうしてそういう仕方、次ぎのジュネレーションを育てることができる、育てることに内面的に助力することができる、また助力していると考えるようになった。

このことは彼らの藝術そのものを弱くした。彼らの作品から一般に夢想の羽ばたきが消え、冒険物語が消え、ユーモアと腕白とが消えて、小市民的に上品な、かならずしも下品ではないという程度のひよわな藝術が残ることになった。だから彼らは、別な面では、冒険物語を書けば南方攻略戦と海賊物語とを書くしかなく、ユーモアを書けば地口とくすぐりと書くしかなく、元氣、活潑、たくましさを書けば熊襲征伐と三韓征伐、金太郎と桃太郎とその他その類とを書くしかなく、犠牲と献身とを書けば例の千松意識の裏がえしを書くしかないという羽目にたちいたることになった。そうして、弱く純粹なその警戒から、彼ら自身そこへ行くことがなかつたにしろ、大量の児童文学者たちが群れをなしてそこへ走りこむのを防ぐことはとてもできなかった。

そこで、結論を急げば、児童文学者たちが血の氣、汁氣を大至急自身に充満して行くことが急務になるということになる。犠牲と献身とが日本人と人類とのためにあることを、作者たち自身まずわかつて行くことが急務になるということになる。すべてのたくましさ、すべてのあくたれ、すべてのユーモア、すべての夢想が、もう一度、そして大規模に取りかえされることが焦眉の急務だということになる。そしてそのために、細い線のようなものとして保たれてきた児童文学者たちの純粹が、新しい段階で、太く弾力あるものとして再生されることがぜひぜひ大必要だということになると思う。

そしてそのためには、片隅で仕事してきた彼らが中央広場に引きだされること、彼ら自身中央広場へ出てくる

ことが必要となり、他の文学者と児童文学者とを隔てていた垣根が取りはらわれ、そのうえでさらに特殊に児童文学者の活動分野が地割りされることが必要となろうと思う。すべての文学者が次ぎのジェネレーション、次ぎの次ぎのジェネレーションの教育責任を自分の肩に負い、この責任の専門の負い手が児童文学者として打つて出るといのが問題解決の順当な手続きとなろうと思う。

われわれは、二十年ないし三十年まえ、このことが、ある形、ある程度で日本に実現されたことのあつたのを知っている。若い文学者、詩人、音楽家、画家、科学者、教育家の自然発生的な協力がそこに生れ、そこでそれが、小さな、しかし美しい実を結んだ。そこで今、それがもう一度、文化の全線にわたる高い段階で新しくよみがえらねばならぬと思う。この協力がもう一度生みだされねばならぬ。文学者、児童文学者の民主主義的召集が実現され、子供のための、文学者、児童文学者、他の分野の藝術家、科学者、教育者の召集が実現されねばならぬ。そうして、彼らが、個々にも結合しても、力量ある民主主義的文化活動者として仕事しはじめることが今日の最大の急務の一つだろうと思う。

そこで初めて日本の子供の運命を具体的、全面的に考えることができる。帝国日本の敗北からバネー号ごめんネ運動の類を引きださずにすむ。軍国主義からの子供の解放ということ、日本兵士の暴行、残虐行為のデタイルスを必要以上子供に知らせることなしに実現することができる。子供たちの受けた大苦痛のあれこれを、ベルリン陥落のときに見られた個人的報復の悲惨に外れさせずに償うことができる。敗戦からしよげた子供を引き出すのでなく、潑刺とした民主主義の子らを引き出すことができるのである。

このことは大事である。一部の新聞が、日本の行くべき道、その未来の運命について、平和なスウィス、平和で文化の高いスカンジナビアの国などを参考資料としていることは前に書いた。そこに悪気はないにしろ、それが日本人にまちがつたあれかこれかをつきつけることになること、日本の再生は、もう一度軍国主義国家となるか、それともスウィスやスウェーデンのような、平和で民主主義的な、しかし人類と文明との敵にたいして力

のうえて弱い国となるか、このことでの二者択一にはないことも前に書いた。軍国主義、封建主義、階級的抑圧主義を絶滅して民主主義革命を仕上げることに、そのことで人類とその文明との破壊者、敵にたいしこれを打ち倒す力を自己に養つて行くことにそれはあるのである。子供のための活動で、文学者、児童文学者、すべての藝術家、科学者、教育者の目ざす目標も同様そこになければならぬ。日本の子供の進むべき道は泣き寝入りにあるのではない。子供らの教師の道は卑屈なインポテンツの養成にあるのではない。人間的な上にも人間的な、血の氣、汁氣の多い民主主義者の養成が最大の眼目である。

このことから、文学者、児童文学者の民主主義的結合ということが問題になろう。また児童文学者自身の民主主義的結合ということが問題になろう。また子供のための活動を中心とするすべての藝術家、工藝家、科学者、教育者その他の結合ということが問題となろう。また文部省の無能力とサボタージュとのなかで、だれがどう教科書を編むかが問題となろう。また、子供のための科学的啓蒙の仕事で、科学者がどんな書き方をするのがいかという種類のことが問題となろう。またさしあたり子供のためにどんな雑誌が出ねばならぬか、どんな絵本が出ねばならぬかという種類のことも至急に問題となろう。そこで私は、そのうちの二つの問題、教科書の問題と科学者の通俗的書き方の問題とで私の考えを書いておきたい。資料を集めての話でなく、たまたま目にふれたのを取りあげたまでである。

教科書については羽仁五郎が書いている。羽仁は「教育を人民の手に取り戻せ」という文章（『日本教育新聞』第一号）で、「小学校教科書の廃止または改正または新教科書の編纂刊行は、現在日本政府文部省はその全予算を最高度に支出し、その編纂刊行の仕事そのものは全くこれをわが教員組合に一任すべきである。全日本教員組合は自ら図書編集委員を選出し、最短時間に必要なる最善の教科書、図書、映画・ラヂオ台本等を編纂刊行するであらう。」と書いている。教育を人民の手に取りもどすことはもとより賛成である。しかし教科書のこととは、「全くこれをわが教員組合に一任すべき」ではなく、そのこと自体人民の手に委ねられねばならぬものと思う。した

がつて、そのための「図書編集委員」もやはり全人民のなかから選ばれるべく、「全日本教員組合」だけから——羽仁は「だけから」とは書いていないが——選ばれては狭すぎることになると思う。

通俗的科學書の書き方については内田清之助（きよのすけ）が書いている。他に小倉金之助、菅井準一なども書いているが、文學、文學者との結合という点で内田の言葉だけをここで考える。内田は科學者と文學者との協力ということを経験に即して書いている。『小國民のために』の『渡り鳥』の序文）

「いふまでもなくこのやうな目的を含めて書かれた本も科學的に正しいものでなくてはならない。さういふことに氣をつかつてゐると文章はいきほひむづかしくなる。また無味乾燥になりがちであつた。私はなれぬこの仕事を中途で幾たび投げ出さうと思つたか知れない。

しかし、幸にも私には森鷗外先生の御子さんの小堀杏奴（あんぬ）さんといふ大變によい協力者があつた。小堀さんはむかしから鳥が大好きであつたといふ。それからまた諸君のやうな讀者の心持をよく知つてゐられる。そこで私の書いた、どうもむづかしくなりがちな、また乾燥しがちな原稿を通読し、上品に書き直して下さつた。また興味ある話を方々へ入れたり、或は話の順序を入れかへて讀者に理解しやすいやうにして下さつた。もしこの本が讀者に親しいものになつてゐるとしたなら、それは小堀さんのお骨折（たづもの）の賜である。」

私は内田、小堀の協力に賛成する。また小堀が適格な人だろうということ、小堀の尽力で『渡り鳥』が読みやすくなつただろうということを根本で認める。けれども、『渡り鳥』を全体として見て、小堀の協力は失敗したのではないかとある程度思う。これを成功と見た内田に勧めがいがあつたのではないか。内田の最初の原稿と比べてみねばわからぬが、また文章論、文体論、文學論になつて行つて面倒にならねばならぬけれども、ひと口に言えば、小堀が「上品に書き直し」たところ、「興味ある話を方々へ入れたり、或は話の順序を入れかへ」たところに、個々についての成功にかかわらぬ全体としての失敗があつたのではなからうかと思う。私は小堀の協力に根本で賛成する。ただ協力の仕方に異議をもつ。内田は自分で書きあげるのがよく、小堀の協力はその批判、

それになりたいする要求として、参考として取りあげるのがよかつたのではなからうか。じかに例証できぬため独断の形になるが、この本の構成と文章とに「文学」の匂いが強く、そのため科学の匂いの薄れたところに問題の根本があると思う。私は科学者が苦しみつつ書き、他のすべての人の意見を容れつつもみずから鎗職や指物師のように骨折つて仕上げ、その結果そこからたつてくる、文学者とジャーナリストとに夢想のできぬ無愛想なあの匂いを尊重する。それを尊重し、また極度に尊重したい。いくら違うけれども、「思ふままの理を頼々と書きたらんは、後来も文はわるしと思ふとも、理だにも聞えたらば、道のためには大切なり。」といった道元の言葉をここで引きだしていいと思う。

(十二月九日)

文学と政党

文学の問題は実のところ厄介な問題である。文学とは何かということを説明することがすでに厄介である。藝術の科学、文学の科学のために払われた労力は大きいけれども、それは他の科学ほどには一般化していない。藝術ないし文学が、他の科学の場合とちがつて、科学的取りあつかいの対象として厄介な性質を持つていることが原因の一つであろう。じじつ藝術の科学、文学の科学は、科学として成立してからの年月がまだ短い。その成果も、性質のちがいを勘定に入れるとしてまだまだあがつていないということが出来る。自然科学の諸部門、哲学、経済学などに比べてそう言えるだけでなく、また日本についてそう言えるだけでなく、世界的規模においても同じことが言えるのではないかと思う。

しかし他方、科学史として時間的にまだまだ短いこと、他の科学に比べてその中身が必ずしも豊富、精密と言えないなどいうことが藝術ないし文学の科学の全部ではない。藝術そのもの、文学そのものの歴史は古いのであつて、ある意味でそれは人類とともに古いということが言えよう。自然科学ということをひろくとつて、火の発明、火食の発明、材木を組み合わせて家をつくることの発明、そこに示される重量の釣合、風力や地震にたいする抵抗の問題、また部落と部落との交通のための道路、橋かけの問題、天体の位置の測定の問題、季節の循環の問題などまでを入れるとすればそれこそ人類とともに古く、それに比べてはやはり文学のほうが新しいと言わねばならぬけれども、少なくとも数千年の歴史を持つていふ点では、文学も決して若い、新しいとは言えぬのである。文学は数千年の歴史を持つていふ。何よりもそれは人間から生れてきた。そしてそれは人間を育ててきた。この事実から見れば、厄介な文学の問題も、それほどわかりにくいもの、それほど説明しにくいものとは一概に考える必要がないのである。人間のつくつてきたもの、人間から生れたもの、人間をそだててきたもの、それを理解するには人間の立場に立つことで七分どおり十分である。それだから、文学の問題を理解するために光学機械を必要としない。電動機もプロペラも計算尺も一般には必要としない。むしろ人としての健全な常識、健全な肉体とその五官、人の人としての資格があればひとまず足りるのである。こういう普通人を標準として、人間の社会生活、その現実生活に対比して考えることで文学の問題は根本的に理解することができる。文学の問題というものはそういうものであり、またそうなければならぬというのが私の考えである。

そこで他の問題、人間の政治生活という問題を考えてみよう。この政治生活というものは、言いかえれば一つの文化的活動である。政治は人間文化の一部であり、政治の問題は同時に人間文化の問題である。一方政治の問題は政党の問題をふくむ。政党そのものが一つの文化的産物である。政党と文学との関係をたずねることは確かに文学の問題の一つであり、さまざまな政党が活動を開始した現在特にこれについて考えることが無駄でないものである。